学園双剣艶舞2
小説 羽沢向一
挿絵 久水あるた
二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

第一章　姉妹は夜を翔けながら　007
第二章　とびっきり気持ちのいいゲームをしよう　041
第三章　ペナルティを恥ずかしいところに刻みこもう　100
第四章　もっと感じるゲームもあるんだ　142
第五章　ルールが変わったから、たまらないだろう　190
第六章　最高に堕ちるゲームエンド　215
エピローグ　249

登場人物紹介

Characters

神楽儀月穂（かぐらぎつきほ）

神楽儀姉妹の妹。蒼白の刀、月光禿に選ばれ退魔師となった少女。琴坂学園では明るい性格の美少女として人気があるが、こと魔物との闘いにおいては凶暴で周囲の破壊も顧みない。

神楽儀冬香（かぐらぎふゆか）

月穂の姉。おっとりした顔つきの美人でＦカップの巨乳教師。白翼の洋弓、ワルキューレンリットを受け継ぎ、かつて体験した悲劇を繰り返さないために魔物を討ち続ける。

紫鳳美玲（しほうみれい）

前作の主人公。白桜学園の生徒会長を務める聖剣克鬼鶴に選ばれた紫鳳流掃魔剣の退魔剣士。性格は品行方正で真面目。グラマーな体形で巨乳であることが自分では気に入らない。

蔦守凪（つたもりなぎ）

前作の主人公。白桜学園のスケバンで、魔剣影女郎に選ばれた蔦守流排魔剣の退魔剣士。喧嘩っ早い性格のクールな吊り目美人。すらりとした長身とＤカップのバストを誇る。

『第二章　とびっきり気持ちのいいゲームをしよう』より

月穂の懸念に反して、悠の手は上半身から離れて、大きなM字を描く下半身にかかったプリーツスカートをあっさりとめくりあげた。冬香のもの以上に飾り気のない白いパンティが、いとも簡単に剥ぎとられた。あまりのあっけなさに、月穂は言葉を失ってしまう。かわりに冬香が痛切な嘆きの言葉を吐いた。

「あああ、月穂ちゃんまで……」

「ココも姉妹で似てるんだ。冬香先生よりも陰毛が薄いよ。ほとんど生えてない。きっと前の月光禿の後継者の、月穂のママも陰毛が薄かったんだな。見てみたかったよ」

「母さんのことを言うな！　どうして、おまえが母さんのことを知っているのよ！」

「鬼綱一族にはいろいろ情報網があるんだ」

月穂の恥丘に、悠が両手の指先を触れさせた。女の局部に、帯電した針を何本も撃ちこまれるような衝撃が走る。

「ぎゃっひいいいいいいうううううっ！」

灼熱のマグマが、股間から脊髄を貫いて、脳の中心に到達した。また首がのけぞり、硬直した全身が上下に跳ねる。

「ううううううううううううう……」

絶頂に達したのではない。性欲が溶岩のように高熱を発して渦巻いているのに、噴火口がない状態に置かれている。悠の手はすぐに恥丘から離れ、肉欲のたぎりを癒やす刺激を与えてはくれない。

（なにを考えてるのよ！　半分魔物のクズなんかに、いじられることを望むなんて）
月穂は胸の内で自分をどなりつけながら、腰が勝手にうねるのを止められないでいる。同じ姿で対面する冬香も、一度の絶頂では解消できない肉花の疼きに駆られて、妹同様に剥き出しの下腹部を何度もしゃくりあげ、愛液の雫を飛ばした。乳首を勃起させたままの巨乳も、たぷたぷと揺らめかせてしまう。
体内を焼く情欲の炎に焙られて煩悶する月穂と冬香の顔を、間に立った悠がにやついてながめた。
「それじゃ、桜井くん。月穂をお願いするよ。阿部くんは、冬香先生を喜ばせてやれ」
桜井が自分でパチパチと拍手をしながら、月穂の背後にまわった。
「会長のその言葉を、待ってたぜー！　蹴られたお礼に、やさしくしてやるよ、つっきー」
月穂は不自由な肢体で精いっぱい首を背後へねじって、毒をこめた声音でどなる。
「つっきーなんて、ふざけた呼び方をしないで！　桜井、わたしに触ったら、おまえも許さないからね！　後でグチャグチャにしてやるから！」
「へっへっへー。つっきー、怖い怖いー。だが、それがいい」
下手くそなラップみたいなリズムをつけてしゃべる桜井の両手が、背後から月穂の前にまわった。
「バカっ！　触るなって言うのに！　絶対に許さない！　きゃひあああああっ！」
乳房が十本の指に握られる。胸だけでなく全身が蕩ける快感が湧きだして、月穂は溺れ

そうになった。人間のくせに魔物に魂を売ったクソ野郎に裸を触られるなど、汚辱でしかない、と頭では思っても、欲望に燃える肉体は勝手に悦楽を貪ろうとする。
妹のよがり声に、姉の喘ぎが混ざり合った。妹よりもはるかに雄大な女教師の美巨乳が、背後から伸びる生徒の指に揉みくちゃにされ、形を変えられている。
「はあうっ、はひいいいいっ、む、胸がっ！　おおおん！」
一度果てた冬香には、声を押さえることは不可能だった。乳悦に痺れて左右に動く冬香の耳に、阿部が興奮してうわずった声を吹きこんでくる。
「冬香先生のおっぱいを揉めるなんて夢みたいだ。二年四組の男子全員が、ホームルームのたびに冬香先生の胸を見て、頭の中で犯しているんだぜ。クラスの男子を代表して、俺が揉んであげるんだから、たっぷり感じろ」
「や、やめなさい、阿部君。あっ、あんんん、あなたは鬼綱悠に利用されているだけよ。はああっ、今ならまだ間に合うわ」
冬香は首を背後にねじって、自分の担任生徒へ懸命の声をかけた。
「へえ、まだ間に合うかな。こんな俺でも！」
阿部のブレザーの背中から、ダークブルーの布を透過して、濃い緑色の蛇が何匹も出現した。正確には、目も鼻もなく、口だけが開いた蛇のようなものだ。
「俺の身体の中に入ってる〈凶器〉眠々娘々（みんみんにゃんにゃん）だぜ」
「あっ、あひいいいっ！」

目のない蛇もどきの群れが、冬香の胴体や腕や剥き出しの太腿に巻きつき、ぬめつく表皮でこすりたててくる。

なぜか剥き出しの女性器には触れてこないが、悠の〈凶器〉で昂らされた身体は、敏感に反応してしまう。揉まれつづける乳房の快感に、蛇もどきに嬲られる身体中の刺激が加わった。

「ひいっ、ひあっ、あああああ！　や、やめなさい！　阿部君、やめて！」

奇怪な〈凶器〉に汚される姉の姿が、月穂に見せつけられる。これまでも阿部からぼんやりと感じていた魔物の気配が、強烈な腐臭と化して吹きつけてきた。

「おまえらは、やっぱり魔物よ。ううう、人間であることを捨てて腐ったゴミカスよ。あんっ、残らず処分してやるわ」

「そのゴミカスに、こんなことをされる気分はどうかなー。出てこい、黒蓮（ブラックロータス）！」

またリズムをつけて吠える桜井のブレザーの脇腹から、黒い蔓が何本も生え、月穂の身体に巻きついてくる。桜井の魔物の気配も濃くなり、神経をいらつかせる。しかし魔物の気配が生む不快感より、姉と同じように身体のそこかしこを刺激されて味わう肉体の快感が、はるかに大きい。

「うっ、うあああ、やめろ、はあああんっ！」

「あふっ、は、離して、おおおうん！」

快楽の汗に濡れて喘ぐ姉妹の顔が、悠の両手につかまれた。月穂と冬香先生は顔をひね

られ、悠の凶悪な、しかし魅力的な笑顔を見せつけられる。
「すてきな光景だな。琴坂学園で評判の美人姉妹が、ぼくが作った〈凶器〉にからまれて悶える姿を見られて、とてもうれしいね。それじゃあ、月穂と冬香先生の身体もほぐれてきたから、〈凶器〉の種を植えつけてやる」
冬香の赤く染まった美貌が、さあっと青くなった。
月穂はわけがわからず、疑問の目を向ける。
「おっと、月穂には言ってなかったな」
悠がスラックスのベルトをはずしながら、もう一度〈凶器〉の製作方法をしゃべった。
「わたしと姉さんに！　ふざけないで、ええっ！」
月穂と冬香の目が、トランクスを下ろした琴坂学園ナンバーワンの美少年の下半身に集中した。二年生にしては幼い童顔と華奢な身体つきには釣り合わない、太く長いペニスが堂々とそそり立っていた。
二本も。
包皮の剥けた赤黒い亀頭が、双生児のようにそっくりの姿を二つ並べて、悠の腹を打った。阿部と桜井の身体から生える触手以上に異様な姿に、月穂と冬香は唖然とする。
「あはははは。驚いた？　これも〈凶器〉の応用さ。姉妹いっしょに処女を奪ってやれるだろ」
姉妹に凝視される双頭の男根が、さらに長さが伸びはじめた。勃起などという生やさし

いものではない。亀頭を蛇の鎌首のごとく前後に揺らしながら、双子の男根が人体としてありえない長さになり、月穂と冬香の下半身へと迫ってくる。

「よ、寄るな、化け物っ！」

「いや、来ないで！」

成すすべなく嬲り者にされたとはいえ、姉妹はまだ処女を守っている。冬香も処女膜は破られていない。今度は確実に処女を奪われ、魔物の種を子宮に植えつけられてしまう。考えるだけでおぞましすぎる。

姉妹ともに全身を揺らして逃れようとするが、阿部と桜井にきつく乳首をねじられた。

「あおおうっ！」

「ひいいいっ！」

四つの乳首から鋭い快感の火花が飛び散り、簡単に抵抗を押さえつけられてしまう。

同時ではなく、片方のペニスだけが動いた。蛇のようにうねり、月穂の開いた内腿の間を進んでくる。まだ本物の毒蛇のほうがかわいいと思える、奇怪極まりない光景だ。

白い恥丘の中心に、赤黒い亀頭が迫る。閉じたままの秘唇が、つつかれた。

「ひい！　触らないで、おおあっ！」

亀頭が器用にうねり、先端を振動させた。激しく昂らされたまま放っておかれた月穂の恥丘がぶるぶると震える。皮膚の内側が気持ちよさでグズグズになるようだ。何度もよがり声を放っているのに、月穂はまた声を出さないように口を固く閉じた。

「むうっ、んんんん、ん――っ！」
閉じた秘裂が、ドリルに砕かれる岩盤のようにこじ開けられる。中に溜まっていた愛液がこぼれて、獰猛な亀頭を濡らす。悠の肉の蛇はいっそう元気づいて、まだ何ものも触れたことのない処女孔へ猛々しく突進した。
月穂は反射的に下半身に力をこめて、膣口をきつく閉じようとする。だが陵辱に慣れた恐ろしい亀頭を相手では、処女の抵抗などあっさりと崩された。入口をこじ開けられ、未成熟の体内へと、魔物化した男根が突入してくる。
初体験の激痛など、感じる間もなかった。月穂の意識は、膨大な快感に吹き飛ばされる。
「ひっきいいいいいいいいっ！」
冬香はまだ入れられていなかった。妹が先に犯される姿を見せつけられている。
「やめて！　月穂ちゃんは許して、はっおおおうっ！」
猶予はほんのわずかでしかない。女教師にも、異常な肉棒が突入してくる。妹と違い、一度喜悦を極めた蜜孔は抵抗することを忘れて、陵辱者をすんなり受け入れた。淫魔力漬けの膣粘膜が、処女でありながら喜々として男子の欲望の塊を呑みこんでいく。冬香は自分の肉体のあさましさに戦慄しながら、あふれる快感に押し流される。
「はっおおおおうううううう、ダメッ！　こんなのはダメえええええ！　こんなことで失うなんて、あひいいいっ！」
「あひいっ、あふっ、いやああっ、いやいやあ！　ふあああああああっ！」

魔力で封印された地図室に反響する、月穂と冬香の処女喪失のデュエットに、悠がすました顔で耳を傾けた。

「姉妹そろって、すてきな声で鳴く。でも、まだぼくのモノは、膣の入口で動いているだけだ。処女膜は破ってないってわかるだろう。次は美人姉妹が同時に処女喪失する合唱を聞かせてもらうよ」

悠の両手が、なにかを握りつぶすように、拳を固く閉じた。二本の肉棒、いや肉蛇が、ぐねぐねと蛇行する動きが、波が伝わるように月穂と冬香の股間に接近してくる。

「はうっ！」

「おんっ！」

月穂と冬香が同時にうめき、全身を硬直させた。悠の言葉通り、力強くうねくりながらも入口に留まっていた二つの亀頭が、進撃を開始した。姉妹の体内を蝕む怪物が無慈悲に進み、最大の抵抗にぶつかった。

月穂は思わず、恐怖を口にしてしまう。

「あっ、ああ、処女膜を破られちゃう！」

冬香は自分よりも妹を案じた。

「月穂ちゃん！　あああ、ごめんなさい。姉さんを、ひいいいおおおっ！」

今度は冬香が先になった。処女膜が無造作に貫かれ、さらに奥へと男根が犯す。

姉の絶叫が銃弾となり、月穂は鼓膜を撃たれた。両耳をふさぎたくても、腕は動かせな

い。冬香の叫び声を浴びながら、月穂もわずかに遅れて、処女膜を突き破られる。
「あがああああああああああああっ！」
予想した激痛はなかった。冬香も、月穂も、処女膜を破壊される苦痛を、注入された魔力によって快感へと反転させられた。本来の苦痛が大きいほど、壮絶な快感の嵐が吹き荒れ、向かい合う姉妹の肉体が同時に爆ぜた。
「っ‼」
「ん‼」
それまで競い合うように快楽と嫌悪が混ざった声をあげつづけていた月穂と冬香は、同時に沈黙した。姉妹ともに口を大きく開き、喉を震わせながら、絶頂の衝撃に息がつまって声が出せないでいる。
向かい合う姉妹の、太い肉蛇に貫かれた女性器から、同時に鮮血があふれた。教檀に滴った冬香の血液が、滝のように段差を流れ落ち、床に広がる月穂の血に合流した。姉妹の血が手をさしのべ合うように混ざり、ひとつの血だまりと化す。
「かひゅうっ！」
「こふゅうう！」
そろって甲高い音を鳴らして息を吹き返した姉妹は、全身の力を失って、背後の桜井と阿部に背中をあずけてしまう。
月穂は無意識に頭を桜井の肩に乗せた、口をだらしなく開いて、荒い息をついた。

『第三章　ペナルティを恥ずかしいところに刻みこもう』より

男性器に刺激を受けて、起きる事態は決まっている。しかし、それが自分の身体で起きるとは、とても信じられない。想像を絶している。

しかし現実は、クライマックスへと進んでいる。数時間前に処女を失ったばかりだというのに、今度は生まれてはじめてペニスをしごかれる月穂には、射精をこらえる方法など、わかるはずがない。腹の中から、嬲られるペニスの根もとへ、熱いものが移動してくる。

（射精する！　女なのに射精してしまう！）

「いやああっ！」

拒否の叫びと同時に、肉棒の中が焼けついた。一生知るはずのない射精は、尿道を内側からこすられて、魂そのものが溶けて流れ出るような快感をともなう。

亀頭がブルッと震え、鈴口が広がった。

「あああああ、爆発する！　ソコが爆発するわあああっ!!」

大量の白い粘液が、夜空へ向けて飛び立つ。月穂は本当にペニスが破裂して、粉々になる幻を見てしまう。

だが精液が噴出した直後に、悠の手が肉幹を離れた。途端に、まだまだ大量に出るはずだと月穂が感じていた射精がせき止められる。あわててペニスの根もとに目をやると、金色のリングが、勃起に喰いこんでいた。

間違いなく、姉の乳首にはまっているリングと同じものだ。それがどういう仕組みなのかと考える前に、凄まじい射精の欲求が押し寄せてくる。今すぐ精液の放出を再開させな

いと、頭が狂ってしまいそうだ。
「あああ、出させて！　射精させて！　このままでは、おかしくなってしまう」
月穂の訴えを聞いて、悠が笑い声を響かせる。
「同じことを、冬香先生もぼくにお願いしたよ。月穂がリングで精液を止められているのと同じで、冬香先生はリングで母乳を止められているんだ」
「姉さんにまで、そんなひどいことを、うっ、あああ」
悠を非難する間にも、射精を求める肉棒が前後に首を振り、ズキズキと疼痛を発した。
月穂の煩悶の表情と、冬香の懊悩の顔つきを、悠が交互に見やり、満足げにうなずく。
「これで冬香先生は母乳を出す快楽を知り、月穂は射精する快感を知ったわけだ。体験したことのないものを我慢するよりも、一度知った悦びを我慢するほうが困難だからな。これから今夜のゲームの第二段階、いやいや、真のゲームのはじまりさ」
「どういうことよ⁉　わたしと姉さんに、なにをさせるつもりなの！」
「お願い、これ以上、ひどいことはしないで！」
姉妹の言葉に、さらなる凶悪な笑い声が答えた。
「そのリングをはずさないかぎり、母乳も精液も出せないんだ。でも、自分の指で触れば、すぐにはずれる。このゲームは先にリングをはずして、出したいものを出したほうを勝利者とするんだ。勝利者は身体をもとにもどしてあげよう。敗北者は罰として、身体はそのままだ。そのままで毎日生活して、琴坂学園に登校して、授業を受けてもらう」

月穂と冬香は顔を見合わせた。姉妹ともに理解した。自分が欲望に負けてリングをはずせば、相手を改造された悲惨な肉体のままにしてしまうのだ。
「卑劣すぎるわ。おまえは〈凶器〉を持っていなくても、人間ではない怪物よ！」
月穂の罵りにも、悠が涼しい顔で応じた。
「鬼綱一族にとっては、それは賞賛の言葉だね。さあ、ゲーム開始だ。みんな、自由にしてやれ」
悠の号令で、月穂と冬香の手足を押さえていた男子たちが離れた。月穂と冬香は打ち合わせをしないでも、同時に悠に飛びかかろうとする。だが半歩も動く前に、月穂の勃起ペニスと、冬香の左右の肥大乳房に、キリングジョークの小型ローラーが噛みついた。
「ぎゃひいいいいっ！」
「はおおおおうう！」
全身を走る快感の電撃に打たれて、姉妹はともにへたりこんでしまう。悠が立ち位置を移動すると、地図室と同じように月穂と冬香はともに淫惨な姿態を見せつけ合ってしまう。
月穂の男根を挟むローラーが動きはじめた。二つの円筒が回転して、勃起のつけ根から亀頭まで、すばやく上下動をくりかえす。精液をせき止められたまま性感の塊と化したペニスが、強烈に責めたてられて、全身の神経が焼き切れるような快感を生みだした。
そして快感が強烈であればあるほど、射精の欲求が凄まじい勢いで大きくなっていく。自分には存在しないはずの精巣が爆発寸前になる感覚が持続して、月穂を悩乱させる。

冬香の膨張爆乳に喰いこんだ二つのローラーも、今にも破裂しそうに見える巨大乳球を容赦なく回転の犠牲にする。強烈な運動エネルギーで、柔軟な乳肉をうねうねと波打たせ、乳房全体をぶるぶると上下左右に振りまわした。シェイクされる爆豊乳の中で母乳が荒れ狂い、ふさがれた乳首へと押し寄せては、リングにせき止められて悲鳴をあげる。

乳房で起きるあらゆる現象が、冬香には快感になった。同時に母乳を出したくても出せない苦悩が噴き上がる。快楽と焦燥が混然一体となって、女教師のまともな思考をグズクズに破壊していく。

姉妹を責めるのは、キリングジョークだけではなかった。包囲する男子たちが、月穂のDカップを揉みしだき、乳首をしごく。冬香の太腿をなでまわし、パンティの上から尻たぶに指を立て、恥丘を嬲る。

全身に与えられる刺激が、ペニスと爆乳に集中して、さらに精液と母乳を荒れ狂わせた。

（出したい！　精液を出したい！　射精しないと死んでしまう！）

頭の中は射精の二文字でいっぱいになる。まともな思考は精液の白い波で押し流されて、欲望だけに脳が漬けこまれてしまう。

「はっ！」

気がつくと、月穂は無意識に両手を下半身へ動かしていた。あと数センチで、指先がペニスのリングに触れようとしている。

（だめ！　姉さんの前で、情けないことはしたくない！）

あわてて両手を男根から引き離そうとするが、ゆっくりとしか腕が動かない。じりじりと移動しながら、指が未練たらしく空を掻いてしまう。
（あああ、このままだと、もうすぐ手が勝手にリングをはずしてしまいそうだ。そんなことをしたら、姉さんに負けてしまう）
前に顔を向けると、冬香は両手を自分の太腿に置いていた。よく見れば、すべての指先が腿肉に食いこんで、何カ所か血がにじんでいる。
（姉さん、そんなにまでして……）
「月穂ちゃん！」
いきなり姉からせっぱつまった大声をかけられて、月穂はビクッと肩をすくめた。少しでも気を抜くと、すぐにリングをつかんでしまいそうで、急いで腕に意識を集中する。
「月穂ちゃん、姉さんの話を聞いて。あああ、んっ、このままでは二人とも、おかしくなってしまうわ。ううん、だから、月穂ちゃんが先にリングをはずして」
「でも、そんなことをしたら」
「この後も、反撃するチャンスはいくらでもあるはずだわ。今は自分の身を守るのよ。月穂ちゃん、リングをはずしなさい！」
月穂は返答をできなかった。ただうなずいて、両手の力を抜いて、本能が動かせるにまかせた。心の奥では、わたしはただ射精したいがために、姉さんに説得されたという形を取っただけだ、と自分をなじりながら。

指先が触れた途端、リングはバラバラに崩れて、路面に落ちた。
「はうっ！」
ペニスの腹に尿道がくっきりと盛り上がるほど、大量の精液が駆け登った。自身の精液の奔流で肉棒を内側からこすられ、月穂の意識が一瞬でホワイトアウトする。なにも考えられないのではなく、思考活動そのものが消滅した。
すべての神経細胞が、射精の快感に溺れるためだけに存在した。出るとか、イクとか、言葉を紡ぐことすらできない。ただ叫ぶのみだ。
「はううううううううううううううっ!!」
鈴口から、とてもひとりの人間が出すとは思えない大量の精液が高々と噴出する。身体のバランスを保てず、無意識にのけぞる月穂の頭から足先までを、自分が放出した白い飛沫で染めあげた。
爆発的な射精をつづけるペニスの下では、膣口から壊れた蛇口のごとく愛液があふれ出し、足もとに大きく熱い水たまりを生みだしている。
「うううううううううううううううううう……」
妹の長い長い射精絶頂を見つめて、冬香は安堵の息を吐いた。そして悠へ挑みかかる視線をわずかに送ると、両手で乳首を縛るリングに触れる。
リングが二個同時に崩壊するとともに、乳首の大きさが倍加して、妹の射精以上の勢いで二筋の母乳が噴出した。

「はおう！　こおおおおおおおおおおおおっ!!」
叫びも、妹と同じく、意味のある言葉を出せない。左右同時のダブル噴乳の快楽は、聡明な女教師の脳を、快楽を貪るだけの下等生物にしていた。
母乳が飛ぶ勢いが乳首をむちゃくちゃに振りまわし、巨大ボリュームの双爆乳を激しく揺らした。自身の動きで母乳が散乱して、自分をかこんで嬲っていた生徒だけでなく、月穂のまわりの生徒へも、甘い匂いのシャワー浴びせた。
「す、すげえ。たまらねえ」
「冬香先生、いやらしすぎるう！」
「もう、がまんできないっ！」
十人の生徒たちはいっせいに自分のペニスを引きだした。二人をいたぶる歪んだ悦びで硬くなっていた若い肉棒は、女教師の母乳シャワーを浴びて、限界までそそり立った。全員が今すぐ射精しないと、どうにもならなくなっている。
「先生！」
「冬香先生！」
「せんせえっっ！」
口々にわめきながら、パンパンにふくらんだ亀頭を、女教師に押しつけた。
冬香は今も持続する母乳放出の大きすぎる快楽に朦朧となり、正常な判断力を失ったまま、両手で生徒のペニスをつかんだ。意味など考えられず、そうすれば自分の生徒たちが

悦ぶと思っただけだ。
「んおっ！」
「わひっ！」
興奮の極にある亀頭を握られただけで、男子二人が同時に精液を冬香の顔と爆乳にぶちまけていた。母乳を飛ばしながら、生徒の精液を浴びる女教師という、淫猥すぎる光景を見せつけられて、他の男子たちも次々と精液を飛ばした。
「あああああああああ……」
白濁した粘液を顔中に浴びて、冬香の意識はますます混濁していき、生徒のペニスを離さなかった。
その前では、月穂が自分の出した精液と愛液に顔からつっぷして、意識を失っていた。失神しながらも、全身に反響する絶頂の余韻に痺れて、手足や背中をピクンピクンと断続的に痙攣させている。
悠は、元〈武器〉使いであり、今では自分の〈凶器〉の養分である姉妹をながめて、満足の言葉をつぶやいた。
「いいな。これはぼくの〈凶器〉の最高傑作ができるよ」

『第四章　もっと感じるゲームもあるんだ』より

さらに動きそうなクラスメイトのペニスを、両手で固定して、唇全体を押しつけた。なめらかで熱い肉の感触が、唇に広がる。山本の身体がガクガクと震えて、はじめて自分の肉棒を女に触らせる快感を訴えた。

「すごいっ！　すごく気持ちいいよ、神楽儀さん！」

唇に押しつけられる高い体温。鼻腔を走る男子の性臭。はじめて知る人間の味。それらが混然一体となって、月穂の体内に浸透してくる。餌に食いつく魚のように、身体の奥底で動きがあった。その意味を、月穂は明確に理解した。

（動いてる！　身体の中で〈凶器〉が動きだしたわ！）

「んんっ」

胸が熱くなってくる。昨日の初体験のときと同じく、肉体を狂わせる魔力が注がれているように、乳房の張りが増して、乳首が自然と硬くなっていく。ただでさえサイズが小さい水着の圧迫感が、いっそうきつくなる。しかし苦痛ではなく、逆に心地よい。左右のとがった乳首に、水着がぴっちりと貼りついて、強烈にしごかれているようだ。

胸以上に、下半身がもっときつい。もともと食いこんでいた水着が、何倍もの力で恥丘全体を揉みたて、布が秘唇の内側まで入りこんでくるように感じる。

（〈凶器〉を植えつけられたせいで、わたしの身体はいやらしくなってるんだわ。手で触られてもいないのに、水着で感じるなんて……）

自分の身体の感覚にとまどう月穂の耳に、山本の焦る声が飛びこんでくる。

「神楽儀さん、口が止まってるよ！　もっと、ちゃんと舐めてよ！」
（そうよ。自分のことより、ゲームをクリアすることを考えるのよ）
あらためて唇を亀頭の先端に触れさせ、舌を押し当てた。全身で最も敏感な感覚器官に、舐めるなど考えたこともないものの味が伝わってくる。
（これが、男の味！　男は、みんな、こんな味がするの!?）
はじめて知る味覚が脳に伝わると、また胸と股間が熱くなり、水着がよりきつくなる。たまらず腰がうねり、尻たぶの上を水着のレッグホールがずり上がった。
（ああ、舐めるだけで、身体がこんなに反応するなんて！　このまま十人も舐めつづけたら、どうなってしまうのか、わからないわ）
困惑する月穂の頭上から、山本の文句が降ってくる。言葉使いが荒っぽくなっていた。
（集中よ。もっと集中するのよ）
丸い表面で、舌を上下左右に動かした。もちろん月穂がフェラチオのテクニックなど知っているわけもない。とにかく刺激してやればいいと思ってのことだ。自分が動きやすいように、左手を山本の裸の尻肉にまわし、右手でペニスの幹を上下にさすった。
月穂の五本の指に握られた山本の尻が、何度も震えたかと思うと、いきなり前へ突進してきた。
「うぐっ！　うごっ！」
舌の表面を亀頭が滑り、亀頭全体が口の中に入りこんだ。舌だけでなく、頬の裏側や口

蓋に熱い肉塊が触れて、口内全体が男のモノで充満しているようだ。
（苦しい！　気持ち悪いっ！）
月穂はペニスを吐き出そうとする。だが逆に山本の両手で頭を押さえられて、さらに奥まで亀頭が押し入ってきた。山本がなにかを叫んでいるが、苦しくて意味などわからない。
「んぐっ！　んんんっ！」
（大きくなってる！　口の中で、亀頭がふくらんでるわ！）
直感的に、射精されるとわかった。口の中に射精されたら、〈凶器〉の魔力がどれほど増大するのかわからない、と思った直後に、舌の上に熱い粘液がぶちまけられた。頭をつかまれたままで、口から亀頭を吐き出すこともできない。喉をつまらせないためには、どっどっと断続的に噴出してくる精液を飲み下すしかない。
（あああっ、いやだ、わたし、精液を飲まされてる！　男の精液が、喉を流れてる！）
口から喉へ、食道から胃へ、とどろどろの粘液が流れていく。
無理矢理飲ませているくせに、山本が身勝手な歓喜の言葉を吠えた。
「飲んでる！　神楽儀さんが、ぼくの精液を、飲んでくれているよ！」
だが月穂は、山本の言葉に耳を傾ける余裕などなかった。精液が胃に到達すると同時に、燃える油を飲みこんだように、体内がカッと熱くなってくる。水着に締めつけられる乳房がさらに快感を増した。水着に直接触れる恥丘の表面も、圧迫を受ける内側の肉襞やクリトリスも、ズキズキと疼く。

（き、きついわ！　この疼き、せつなくて、おかしくなりそう）
「うんんんっ、んんくふう……」
亀頭を口に含んだまま、唇の端から熱い吐息があふれ、飲みきれなかった精液が唾液と混じって滴り落ちた。まるで餌をもらった犬が主人に媚びるように、水着の食いこんだ尻を左右に振ってしまう。
全身を蝕む異常な官能に悩まされながら、月穂は口から亀頭を吐き出した。
山本が満面に笑みを浮かべてうなずいた。
「神楽儀さんの口は、最高に気持ちよかったよ。みんなにも教えてくるからね」
「えっ、ちょっと待って！」
静止を聞かずに、山本はスキップで生物準備室から出ていった。水着で追いかけるわけにもいかず、残された月穂は床に尻をぺたんと着けて、呆然とする。
「みんなって、こんなことを言いふらされたら」
どうなるのか、と口にする前にドアが開いて、十人あまりの男子がどやどや入ってくる。知っている顔と知らない顔が半々だが、全員が最初は仰天して、つぎに欲望に目をギラギラと輝かせた。
「おお、本当に神楽儀さんだ！」
「神楽儀がエッチな水着で待ってるって、本当だったんだ」
月穂が知らない男子も含めて、全員が名前を呼んだ。自分で思っている以上に、月穂は

有名人らしい。ひとりが指差して、とんでもないことを言った。
「あれ、見ろ。口についてるの、精液じゃないか」
月穂はあわてて、唇の端をぬぐった。手の甲に白い粘液が広がる。
その仕草が、男子の欲望の火を一気に劫火へと燃え盛らせた。口々に獣のような叫びをあげて、水着の肉体をかこんだ。全員が競うようにスラックスを下げて、早くも勃起する下半身を露出する。
四方八方から十本もの亀頭を突きつけられて、月穂は頭がクラクラした。だが複数の雄の匂いが混ざった空気を嗅がされて、いよいよ〈凶器〉がざわつき、肉体が熱くなる。水着に緊縛される乳房と股間が歓喜の鳴き声をあげた。
顔も名前も知らない、しかし優しそうな容貌の男子の亀頭が、口に突きつけられた。こんな状況でなければ好感が持てたかもしれないが、今は勃起しか印象に残らない。亀頭が息せき切って迫る。
月穂はやらなければならないとわかっていても、どうしてもためらってしまう。そのわずかな時間も待ってもらえず、またもや髪をつかまれ、強引に口を亀頭に押しつけられる。
「うっ、待って。ちゃんとするから、髪を放して」
月穂は訴えたが、自分の行為に興奮した男子は、聞く耳を持たなかった。さらに強く、月穂の唇が男根にこすりつけられる。
「やめて。人を道具あつかいしないで、ううっ」

『第五章　ルールが変わったから、たまらないだろう』より

その丸鋸は、意識が遠のいたわずかな時間で、体内にもどってしまっている。流しこまれた魔力のためか、もう一度マスマーダラーを出そうとしても、できなかった。

すばやく自身の状況を確認すると、月穂は目の前の姉に意識を集中した。

目の前で、四つん這いの姉が身悶えていた。手足をオレンジの魔物に固められて、不自由な身体を大きく揺らしている。重く垂れた爆乳が、下から伸びるオレンジ色の粘体に包みこまれ、容赦なく揉みたてられているのだ。

魔物の無慈悲な握力は、熟した果実を枝からもぎ取ろうかとするように、右のGカップを超える巨乳房を、長く引き伸ばしている。月穂はいたたまれずに叫んだ。

「やめて！　姉さんの胸がちぎれてしまうわ！」

「だ、だいじょうぶよ、月穂ちゃん」

冬香は顔を上げて、赤く染まった美貌を妹へ向ける。

「これくらいで、〈凶器〉に大きくされたこの胸は、壊れたりしないわ。うんっ、だってちょっと痛いけど、その何倍も気持ちいいんだもの。こんなにひどいあつかいを受けているのに、胸が気持ちいいのよ」

「姉さん……」

母が死んでから、ろくに口をきいてこなかったとはいえ、姉がこんな恥ずかしいことを自分からしゃべる人間ではないことを承知している。

冬香の左の乳房も、逆の方向に虐待を受けていた。下から突き上げる粘体がドリルのよ

うに乳房をえぐり、横に広がった乳肉が今にも弾けそうだ。
見ている月穂のほうが、胸に痛みが走る惨状だ。それでも冬香の顔はあきらかに快楽に蕩け、よがり声をあふれさせている。
「わ、わかるでしょう、月穂ちゃん。わたしの胸は、なにをされても気持ちよくなるの。だから、心配しないいひひいいいっ！　出るっ！　母乳がでちゃうっ！　いっぱい母乳出るうううう！　くほおおおおうううっ!!」
つきたての餅のように引き伸ばされた右の乳房をつかむ粘体が、指のようなものを開いた。反動で大きく跳ね上がった爆乳の先端で、乳首がブルブルと震えて、大量の白いミルクを四方に飛び散らせた。
わずかに遅れて、つぶされていた左乳房も、粘体から解放される。膨張して暴れる乳房から、新鮮で濃厚な母乳が散乱する。
たちまち、むせかえるほどの甘い香りが、月穂の鼻腔に押し入り、肺が姉の匂いで染められる。はっきりとわかる姉の絶頂の匂いだ。
「姉さん……」
「おおお、はんんんん……いい、気持ちよくて、どうしようもないのよ、月穂ちゃん……」
また冬香があからさまに快感を訴えてくる。口を動かすたびに、唇の端から透明な涎が滴り落ち、オレンジの魔物の表面に溜まった母乳の水面に波紋を作った。
（怖い。姉さんの身体だけでなく、心まで変えられていくみたい。わたしも男のモノをつ

けられたままで、何度もいたぶられていたら、射精の快感に支配されてしまうのかしら。男のモノをしごかれて、ところかまわず精液をまきちらす、情けない女になっていたのかしら……あっ）

背後から、狼男の両手がまわってきた。毛むくじゃらの指の先に、人間よりもはるかに鋭い爪が競泳水着の胸の上で、二つの円を描く。かすかな痛みが乳房に走ったかと思うと、ライトブルーの布が丸く切断されて、ポロリと床に落ちた。

まるでボンデージのコスチュームのように、水着の胸に空いた二つの穴から、月穂のDカップが姿をあらわにされた。穴がそれほど大きくないので、乳球の根もとが締めつけられて、乳肉が前へせり出してしまう。先端の乳輪もぷっくり盛り上がり、乳首がピンとしこっている。

生物準備室で十人の男子に嬲られた余熱がまだ残っているうえに、すぐ目の前で姉の巨乳絶頂を見せつけられたのだ。ひとりでに乳首が硬くなっても不思議はない。そう思いこもうとしても、恥ずかしさは変わらない。見ているのが魔物と、姉だけだとしても、恥ずかしいのは変わらない。昨日まで処女だった自分が、快楽に敏感な肉体になっているのが、恥ずかしくてたまらない。

「あうっ！」

右の乳房にまた鋭い痛みが走る。今度は狼男の人差し指の爪の先端が、ほんのわずかだが白い肌に刺さっていた。爪を抜くと、赤い血の粒が小さくふくらんだ。

「くっ！」
　左の乳房に爪が刺さる。乳輪と白い肌の淡い境界に、また血の粒が、まるで待ち針の頭のように現れた。
「んんっ！」
　爪が次々と浅く刺さっては抜かれて、水着から飛び出した二つの乳房に赤い粒をいくつも作られる。
（こいつは、人間並の知性があるんだわ。ただ食べるのではなくて、変態行為を楽しんでいる。ちくしょう！　くそったれ！　最悪だわ！）
　魔物の中でも、知性のあるものは最大の憎悪の対象だ。母を殺したのも、人間に化けた知性タイプだった。それなのに、仇敵から、母の仇から与えられた痛みが、自分の乳首を興奮させている。
（くそっ！　姉さんと同じだ。〈凶器〉が巣食うこの身体は、もう狂ってる！）
「あっ、やめて！　そこは触るな！」
　狼男の手で、水着の股間をつかまれた。反射的に後ろ手縛りの身体がくねるが、なんの抵抗にもならない。魔物の爪の前に、水着はあっさりと屈伏して、女の秘密をあからさまにされた。それも姉に向かって。
　月穂の下腹部のすぐ前には、四つん這いで固定された冬香の赤く染まった顔がある。狼男の両手が下がり、恥丘の左右にそれぞれ四本の爪を刺された。

「ひっ！」
爪を刺されたまま、痛みとともに肉唇が広げられる。姉の顔へ向けて、妹の肉の花が大きく開花させられてしまう。
「姉さん、見ないで！」
懇願する月穂の女肉は、胸の苦痛のために、じっとりと濡れていた。性感帯を直接刺激されているならまだしも、傷つけられて蜜をあふれさせるなど、自分がどうしようもない淫乱な異常者だと思えてしまう。
「お願い、見ないで！」
「え、ええ」
月穂の訴えを聞いて、冬香は顔をそむけた。
直後に、月穂の股間をくぐって、狼男のどすぐろいペニスが出現した。月穂が今日目にした多数の男性器のどれよりも太く、長く、猛々しいエネルギーに満ちあふれている。肉棒全体に太い血管が網の目のように這いまわり、ゴツゴツと浮き上がっている。亀頭の周囲にはイボが並び、禍々しい空気を放つ。
しかも男根だけが別の生物のように蠢いている。濡れてぎらつく亀頭が、右に左にグネグネとまさに首を振って、月穂を威嚇する。まさに魔物の肉の槍だ。
「や、やめて！　姉さんの前では、うあ！」
魔物の亀頭が、膣口に突っこんできた。メリメリという粘膜が裂ける音が、月穂の体内

に響き、月穂は息をつまらせた。悲鳴も出せず、口だけが釣り上げられた魚のように開閉する。

（か、身体が二つに引き裂かれる！）

心底、恐怖してしまう。今まで数えきれない魔物と戦ってきたが、これほどの恐怖を感じたことはなかった。しかし、どうにもできない。膣壁の肉をガリガリと削られながら、ひたすら身悶え、水着からあふれた乳房を揺らすばかりだ。

冬香の耳にも、濡れた肉の摩擦音が高く鳴り響いた。女の身体が強引に貫かれる、あまりに凄惨な音色だ。同時に、母乳絶頂の余韻で意識が爛れる冬香には、体内に心地よく反響する極上の音楽でもあった。

戦慄と魅惑のハーモニーに引かれて、冬香はつい音源に顔を向けてしまう。

「あああ、月穂ちゃん！」

姉の目の前で、妹の膣口が引き裂ける寸前まで押し広げられていた。魔物の牡肉が悠然と出入りするたびに、膣粘膜がかきだされて裏返り、奥から愛液がどぼどぼと搾り出される。早くも月穂の両脚の間に、透明な水滴がいくつも落ちていた。

冬香の視線が向けられていることに気づいて、月穂はダムが決壊したように声をほとばしらせた。

「見ないで！　あああ、姉さん、見ないでえ！　あふうっ、はひいいいっ！」

拒否の言葉とともに、狂おしい喘ぎが吐き出される。月穂の叫びが、はっきりと示して

いた。姉に最悪の部分を見られる羞恥に身を焼きながら、開発された膣が生みだす快楽に溺れている。人間を超えた凶悪極まりない魔の男根からも、快楽を吸い上げている。

冬香は自分たちの陥れられた運命を呪うしかなかった。

(ああ、もはや誰からなにを突っこまれても、わたしたち姉妹のあさましい肉体は快感を貪ってしまう。たった一日で、自分たちはそんな存在に堕ちてしまったのだわ。でも、でも、まだこのまま終わっていいはずがないわ)

「あああああ、姉さん、いやっ！　いやあああああっ！　はあんんおう！」

「月穂ちゃん、闘うのよ。快楽に負けても、わたしたちは闘いつづけることができる、ああっ！」

尻を強く押されて、冬香の身体が前に飛び出し、斜めにかしいだ。姉の引きつった美貌が、狼男の獰猛なペニスに蹂躙される妹の女性器にぶつかる。濡れた音が鳴り、汗と愛液が飛び散った。

あわてて背後へ顔を向けると、恐ろしい光景が目に飛びこんでくる。

高く掲げた自分の尻の間で、新たに伸びてきた粘体が激しく蠢いている。自在に形を変える魔物の肉体は、器用に尻たぶを広げて、Tバックが走る尻の谷間の奥に吸いついてきた。大きなナメクジかカタツムリに這われているような感触が、じわじわと谷底を下へと降りてくる。

マイクロビキニのごく小さな布が押しのけられて、肛門があらわにされた。小さくすぼ

まったしわの中心に、オレンジの粘体が押しつけられる。
「ひいっ！」
冬香は戦慄した。前の月穂の膣から聞こえる摩擦音と似た音色が、自分の尻の奥から聞こえている。
（お尻が犯されてる！　わたしのお尻の穴に、魔物が入ってくるう！）
「そこは、違うわ！　そこは、お尻よ！」
この魔物に、人間の言葉が通じるのかはわからない。冬香の叫びは無視されて、肛門が押し広げられる。冬香は必死になって肛門括約筋を締めつけるが、外から侵略する魔物の暴力には勝てない。粘体が後から後から押し寄せて、尻の内側へと潜りこんでくる。まるでオレンジの魔物が、冬香の体内に寄生しようとするようだ。
そして恐ろしいことに気づいた。肛門を嬲られ、腸の粘膜の中で魔物が蠢く感覚は、苦痛ではない。一度、そう気づいてしまうと、油に火がついてしまったように、尻から快感の熱が伝わってくる。
「あああああ、はじめてなのに、お尻が気持ちいい！」
気持ちいいのが恐ろしかった。冬香にもアナルセックスの知識はある。しかしこの二日間の陵辱では、一度も肛門には触れられなかった。なんの準備もなしに、いきなり肛門に挿入されても、快感など得られるはずがないのが常識だ。
しかし今の冬香は、突然の肛門挿入にも、悦楽しか感じられない。そんな自分の肉体が

恐ろしすぎる。
「いやああっ！　こんなことで気持ちよくなるのはいやっ！　あひいいっ、んんんんう」
月穂と同じ拒否と快楽を交互に叫ぶ口が、別の粘体にふさがれた。喉の奥まで、魔物の肉体の一部が潜入してくる。
同時に乳房責めが再開した。再び左右の巨乳に粘体が巻きつき、きつく締めつけられる。
「んむうううううっ！　ん、んんっ、むぐおおおお！」
喜悦が新たに燃え盛り、乳首に残っていた母乳がすぐさまあふれ飛んだ。目の前で快感のタップを踏む月穂の両脚を、母乳で白く濡らしてしまう。
「姉さん、お尻まで犯されてる！　そんなに、お尻が、気持ちいいの、あおおうう！」
月穂を犯す魔男根が、また長さを伸ばした。重い衝撃が、さらに女体の奥へと突き進む。
「子宮が！　子宮まで、亀頭がとどいてるっ！」
子宮の入り口を硬く太い怪物に打たれて、全身がバラバラになる思いがする。このまま犯し殺されてしまうと、戦慄する。それでも快感はやまない。増大していくばかりだ。
左右の乳房にも、再び鋭い爪が襲いかかってきた。乳房が次々と突き刺される。勃起乳首の先端にも、何度も爪を刺された。敏感な肉筒に激痛が走り、すぐに深い歓喜へと変化していく。
子宮を犯されながら身体を傷つけられる変質的な悦楽に酔いしれ、月穂は錯乱した言葉を口走った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/